

# 土佐のわらべ

第350号 《第372回（2010. 7. 8） 子どもの本の読書会記録》 参加者5名

『すばらしいとき』 ロバート・マックロスキー／文・絵 わたなべしげお／訳 福音館書店

ペノブスコット湾に浮かぶ小島で、両親と二人の娘たちが、ひと夏を過ごしている。娘たちは、岬の岩陰で泳いだり、島の間をヨットにのって遊んだり、ときには夜の海に漕ぎ出すこともある。

大きな嵐がきた時は、家族みんなで嵐に備える。大急ぎで本土に渡り、食料とガソリンなどを買い込んでくる。嵐の最中には、雨風にまけないくらいの声で歌をうたう。

嵐が過ぎ去った朝、島のあちこちには嵐の名残がある。窓には潮がふきつけた跡が霜のような模様をつくり、倒れた木の根元からはインディアンの貝塚が現れている。

やがて、はちどりが夏の終わりを告げ、家族が島を去るときが来る。島で見つけた宝物を持ち、これからゆく場所のことを考えながら、船に乗る。もうひと夏のおわりだ。

7月の読書会の課題図書は、ロバート・マックロスキー作の『すばらしいとき』でした。ペノブスコット湾全体を見渡した遠景から、湾をよこぎってふりだした雨を追い、みさきの上に立つ二人の娘へとクローズアップされていく、みごとな視点の移動からこの絵本は始まっています。

素朴な線にやわらかな色彩を重ねた絵は、随所に深く印象に残る場面がありました。夜の海で、ボート遊びを楽しむ二人の娘たちを、空にある星がみおろし、水にうつった星の影がみあげている頁。嵐の最初のうねりが遠くの島でさざ波となっている頁をめくると、一転して劇的なまでの暴風雨。ここから、嵐が過ぎ去って月が現れるまでの数頁は圧巻です。絵本ならではの展開に息をのむ思いがします。

読書会に参加された方々からは、絵本に使われている言葉の美しさや、描かれている風景に着目し「絵本というよりも、美しい言葉がちりばめられた詩を読むかのようなようだった。」「記憶の中にある、忘れていた風景の数々、宝物のような風景を思い出させてくれる本だった。」といった声が聞かれました。

また、随所に登場する「おまえたち」という呼びかけが、まるで父の視点を感じさせ、自分にも呼びかけられているかのように感じ、この書き方に好感がもてたという声もありました。

子どもの絵本といえば、必ず名前のがるマックロスキーです。大人がこの絵本の良さを存分に味わって、子ども達に手渡していきたいものです。

(N.T)